慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	葉紹鈞『倪煥之』について
Sub Title	On Ye Shaojun's Ni Huanzhi
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.379- 397
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0379

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

葉紹鈞『倪煥之』について

杉野元子

一　はじめに

一九七六年の文革終結後の中国の文学界には、それまで長い間休筆をよぎなくされていた作家の復活、そして大量の新人の登場により、傑作、力作、問題作が次々と生まれてくるが、この文革後新時期文学の始発期を飾った作品の一つが劉心武の『班主任（クラス担任）』（「人民文学」第十一期、七七年）である。四二年生まれの作者劉心武は、六一年に北京師範専科学校卒業後、七六年まで十五年間北京第十三中学の教師をしていた。劉心武は作家として、おのずからにこの長い教育現場での経験、見聞を生かした作品を多く執筆することなっているのだが、『班主任』もそのなかの一つである。まずあらすじを紹介する。

中学教師張俊石は、非行少年として警察に捕まっていた宋宝琦を、教育者の良心から、決心して自分のクラスに受け入れる。しかし、クラスに迎えた宋宝琦の持ち物の中から、学校の廃品書庫から盗んだ『牛虻（あぶ）』という本が出て

きた。張先生は、中学時代このイギリスの作家が書いた本を読み、主人公の向上しようとする姿に感動したことを思い出すのだが、共産主義青年団支部書記をしている謝恵敏という女生徒は、この本の中の恋愛場面を描いた挿絵を見ただけで、これはエロ本だから批判しなければならないと叫び出すし、宋宝琦は宋宝琦で、張先生が『牛虻』の挿絵の女の顔にすべてヒゲを書き加えた理由を問いただすと、不良仲間と一人一冊ずつ選び、その本の中から女の絵が出たら、ヒゲをつけることとし、誰が一番多くヒゲを書くかを競争しただけだなどといって、そのあと、あわてて、すみません、こんなエロ本は読むべきじゃない、とつけ加えるのである。張先生は、「謝恵敏のような品行方正なよい子と宋宝琦のような品行不良な悪い子、この二人の違いはたいへん大きいというのに、『牛虻』をエロ本とみなす点では、なんと二人は一致するのだ――しかも、二人はどちらもこの本を読んでいるわけではないのに、彼らは当然のごとくこんな結論を下すのだ。これはなんと驚くべき社会現象だろう」と考え、「最も革命的なロジックとスローガンを使って、最も反動的な愚民政策を隠蔽した」、かの「四人組」に対して、骨の髄までの恨みを抱くとともに、今後はこのような「『四人組』の流した害毒を謝恵敏が浄化するのを援助するだけでなく、さらに『四人組』を暴露批判して、指導性をもった読書活動を展開し、宋宝琦をもふくめた全クラスの生徒を教育しよう」と決心する。これが、この小説のあらすじである。

さて文化大革命の時期、知識人たちは、「臭老九（九番目の鼻つまみ者）」と呼ばれ、階級の敵を測る社会的物差しでは「裏切り者、スパイ、走資派、地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派」に次ぐ第九位に位置づけされていた。また毛沢東は昔ながらの形式的教育（長い在学期間、書物中心の学習、試験）を無益と見なしたため、たとえば七三年には、大学入試のときに、裏に長時間重労働に従事する自分のような者にはこうした試験は無理である旨の抗議文を書いて白紙答案を提出した生産隊隊長の張鉄生が英雄視されるという事件も起きた。このような社会状況下で育った宋宝琦

は、「知識がなんの役にたつんだ。ひっきりなしの造反こそが最高だ。きけば張鉄生は試験ででっかいアヒルの卵をもらったが、偉いひとになったそうではないか」と考えるようになっていた。また模範的革命家となり、共産主義という大義のために闘うことを目標としていた謝恵敏は、強固で素朴な労働者階級の感情をもつ一方で、視野がせまいため、軽信や盲従に陥りやすい人間となっていた。

文革による傷痕を描いた「傷痕文学」の代表作『班主任』は、いわば「四人組」の文化独裁により、非行少年だけではなく、模範的人物とみなされていた少女さえもが、精神を蝕まれていたという重苦しい現実を描いている小説なのだが、それとともに、文革後教師としての自信と責任感を取り戻し、空洞化した教育現場の再生に取り組む張の姿を描くことによって、明るい未来を予感させるものとなっている。

『班主任』のなかに、張が「救わなくては。『四人組』に傷めつけられた少年を！」と心の中で叫ぶ一節があるが、これは中国近代文学の始発期を飾った魯迅『狂人日記』（「新青年」第四巻第五号、一八年）の末尾の「人間を食ったことのない子どもは、まだいるかも知れぬ？　子どもを救え…」という一節を念頭に置いて使われた言葉であろう。中国では『狂人日記』が発表された翌年には五四運動が起こり、民主と科学を旗印として掲げ、封建的伝統の打破、国民性の改造をめざした新文化運動が高まりをみせた。この五四時期には教育界でも、全国教育会（一五年）、中華職業教育社（一七年）、中華教育改進社（二一年）などの教育団体の創立や「教育與職業（教育と職業）」（一七年）、「新教育」（一九年）などの教育関係の雑誌の創刊が相次ぎ、西洋の教育思想や教育制度を紹介し、現行の教育を改革していこうという気運が盛り上がり、その成果の一つとして二二年には六三三制を採用した壬戌学制が発布された。このように、五四時期には伝統的封建教育を廃止し、西洋の教育理論や方法を移入し、近代的教育を行おうとする気運が興っているのだが、そ

れから約七十年後のこの時期に、劉心武は、どうして中国の教育界の病根をえぐり出し、再び魯迅と同じように子どもの救済を訴える作品を書くことになったのであろうか。この基因を考えるとき、見逃すことのできない重要な作品が、じつは本稿で問題とする葉紹鈞の『倪煥之』なのである。この作品は、五四時期前後から第一次国内革命戦争時期（二四年～二七年）にかけて、この時代に生きる青年教師倪煥之がどのような姿勢で教育に取り組んだかということを中心として描いている小説である。前置きが長くなってしまったが、以下、本稿では、葉紹鈞『倪煥之』を、そこに描かれている主人公の青年教師倪煥之と教育との関わりの問題に焦点を置き、考察する。

二　『倪煥之』について

葉紹鈞（一八九四～一九八八年）は、一九一一年蘇州公立中学卒業後、一二年から二一年まで小学教師をし、その後も三〇年まで編集者をするかたわら、中学や大学で教鞭をとっていた。一三年から小説を書き始めたが、彼が一番多く書き、また最も成功したのは、自分の熟知している教育界を舞台としたものである。二八年、「教育雑誌」に十二回にわたって連載された『倪煥之』は主人公を教師に設定した全三十章からなる長編小説で、葉紹鈞の代表作と見なされている。『倪煥之』には、倪煥之の一生が、途中時間を倒置させながら描かれているが、それを年代順に並び替え、教育との関わりに焦点を絞り、倪煥之の教育観の変遷に触れながら作品をみていこう。

①一六年冬以前の倪煥之

『倪煥之』の二章と三章には、一六年冬以前の倪煥之の歩みが略述されている。倪煥之は、科挙を目指して私塾で勉

強するが、十二歳ころ科挙が廃止されたため、中学に入学、最終学年である中学五年生のとき、辛亥革命を体験する。卒業後小学教師となるが、最初の赴任先の学校の環境がひどく、また同僚にもめぐまれなかったため、「この世の第一の苦しみ、第一の刑罰こそ教師生活だ。いつになったらぬけだすことができるのだろう」[1]と悩む。しかし転勤し、そこで敬服すべき同僚と出会ったことがきっかけとなり、教育に興味を覚えるようになる。

②一六年冬から一九年までの倪煥之

全三十章からなる『倪煥之』のうち、途中二、三、七、一九章を除く前半二一章までは一六年冬から一九年までの倪煥之の記述にあてられている。倪煥之は一六年冬、再び田舎町の高等小学校に転勤、その学校で教育改革に熱心な校長蔣冰如と出会う。着任歓迎会の席で、倪煥之は「自分は政治にはまったく関心がない」、そして「中国がよくなる日がきっと来る、いや、全世界が、大砲のかわりに理解と同情とをもって相まみえる日がきっと来ると信じている。むろん、それは各人が正しい人間になる道を理解した後である。その正しい人間をそだてるものは、教育のほかに何があるだろうか。すべての希望は教育にかけられている」と発言する。蔣冰如は「われわれは、なにものをも児童に与えることはできない。ただ児童が、自分で探しもとめ、自分で自分を育ててゆけるように、適当な環境をしつらえてやれるだけだ。われわれは、傍からいろいろと手助けしてやれるだけなんだ」という児童中心主義の考えの持ち主で、学校内に、農園、劇場、工場などを設け、子どもに社会に出ても適応できる能力をつけさせようと考えていた。倪煥之はこの蔣冰如の教育改革プランに賛同する。

さて意気投合した倪煥之と蔣冰如は、その試みの手始めとして、一角に無縁墓地がある土地を農園にして、子どもに

農作業の体験をさせようとする。ところが、このような急進的な教育改革に、町の人々は反発、また町のゴロツキの親分である蔣士鑣がうそをつき、あの土地は自分の所有地だと主張したため、騒ぎが大きくなり、「蔣冰如が墓をたくさんあばいたから、町が平和でなくなるだろう」、「蔣冰如のような田地横領、墳墓盗掘の悪人は、町の最高学府の校長たる資格なし」という文面のビラが町のあちこちに貼られ、学校側はこのような封建勢力の圧力によって妥協を強いられる。だが倪煥之は、これに挫折することなく、引続き紆余曲折が予想される教育改革の道を歩こうとする。

一八年、友人金樹伯の妹佩章と結婚。一九年、五四運動が町へも波及する。それ以前の倪煥之は、新聞も読まず、軍閥の浮き沈みのニュースにも興味をもたなかったが、五四運動のうねりのなかで、「どうやって社会全体を覚醒させるかということは、どうやって学校をうまく経営し、生徒をよく教育するかということと、重要性の等しい仕事」だと考えるようになる。一九年冬王楽山という学生時代の友人で、革命運動の組織に加わり、積極的に活動している人物と再会する。王楽山は、「彼ら（新しい方法で教育した倪煥之の教え子たち――筆者注）は社会に入り、さまざまな業務につくが、結果は同じで、社会によって呑込まれてしまい、特別なところなど少しも見いだすことができない」、「社会には組織がある」、「社会を改造するには、組織的にやらなければならない」と助言する。この王楽山の言葉に心を動かされた倪煥之は、「この教師生活を捨ててしまおう」という思いにとらわれるのであった。

③二〇年から二五年春までの倪煥之

二二章後半部分には二〇年から二五年春までのことが略述されている。倪煥之は、軍閥同士の内戦が続く国内情勢に身を置くなかで、「ただ生徒に物事を処理し、情勢に対応できるような能力をつけさせるだけが、必ずしも」教育の「根

底ではない」と考えるようになる。そして「第一次代表大会宣言」を読み、「十数年前深い興味をもつようになった『革命』の二字が、いままた彼の脳裏に根を生やし、固定した観念を形成」するようになり、また「同時に、彼は教育の更に深い根底を発見した。教育のための教育というのは、まったく意味のないまやかしの言葉にすぎない。目前の教育は革命から出発しなければならない。教育者がもし革命をしらなければ、すべての努力が徒労となる。革命家が教育を顧みなければ、よりどころを失い、空洞状態となってしまう。十年来、自分は教育者として自負してきたが、なにかしらの実際的な成績を求めるなら、今から革命の教育者とならなければならない。」という考えに達する。

倪煥之が読んだ「第一次全国代表大会宣言」というのは、二四年一月、広州で開かれた国民党第一次全国代表大会で採択された「宣言」であろう。この時期、国共合作が成立して、全国民挙げて革命を行なおうという気運が高まり、文学界でも、文学のための文学を否定し、革命のための文学を主張する人々がでてきたが、教育界に身をおく倪煥之は、教育のための教育は意味をなさない、革命を目的とした教育を行わねばならないと考えるようになる。そして二五年春倪煥之は、王楽山の紹介により、上海の女子中学教師の職を得て、上海へ移る。

④一九二五年五月三一日と六月一日の倪煥之

一九二五年五月三〇日、上海で数百人の群衆が、排日演説をしたため検束された学生の釈放を求めて抗議行動をおこした。これに対して共同租界の警察が一斉射撃をしたため、多数の死傷者をだすという大惨事となった。一二章前半は、この五・三〇事件翌日三一日の上海の街が舞台となっている。葉紹鈞は、『倪煥之』が二九年に開明書店から単行本として出版されたとき、「作者自記」を書き、そのなかで一二章前半について「一人の敬愛する友人の文章を採用した。彼は

この大事件を自ら体験したが、私はしていない。彼が記載したこの大事件はいきいきとして力があるので、私は採用して必要な箇所に挿入した。[2]」と告白している。管見の限りでは、この「敬愛する友人」が誰なのか、明らかにされていないようだが、これは茅盾である。葉紹鈞は、「文学週報」第一七九期（二五年六月二八日出版）に「五月卅一日急雨中」という一文を、茅盾は、翌週の「文学週報」第一八〇期（七月五日出版）に「暴風雨――五月三十一日」という一文を載せている。葉紹鈞は、自分と茅盾との五月三一日上海での見聞を綴った文をつなぎあわせて、二二章前半部を書いたのである。

倪煥之は、三一日正午に学校を出て、前日多数の死者を出した街路へ行く。そこには雨の中傘もささずに集まった若者や労働者がおり、いろいろな商店に入っては演説を行っている。倪煥之も一軒の店に入り、演説をする。店を出たとき、演説している一人の肉体労働者の姿を目にし、「胸をはだけた友人、君は偉大だ、たくましい！…君こそが解放の優先権をもっている」という思いにかられる。ここまでの部分は、葉紹鈞自身の「五月卅一日急雨中」が下地となっている。次に、自転車に乗った人々が来て、ビラをばらまく、租界の警察が標語を書いた紙を剝すが、群衆によってすぐにまた貼られる、警察が群衆を追い払うためにホースで水をかける、デパートの屋上からビラが撒かれる、群衆が総商会を包囲しに行く、という描写があるが、これは多少の変更はあるものの茅盾の「暴風雨――五月三十一日」から引用している。

横光利一も五・三〇事件前後の上海を舞台とした小説『上海』（三二年、改造社）の三五章で、五月三一日の上海の街頭での群衆運動の様子を描いている。参木は、ホースで水をかけられる群衆や総商会を取り囲む群衆を目撃するが、それによって参木は自分の内にあるナショナリズムの意識を再確認するだけであり、民族の壁を乗り越え、中国人労働者

と連帯を求めることはしない。前田愛は、『上海』について、「横光が上海という都市のテクストから切りだしたメタテクスト――『外界の運動体』は、流動するおびただしいイメージを方向づける三つのベクトルをもっている。第一が植民地都市、第二が革命都市、第三がスラム都市というベクトルである。」と分析し、この三つのベクトル間を移動する参木について、「公園やダンスホールを明るませている光の罠にとらえられていた参木は、工場や街頭に密集する群衆の波をくぐりぬけ、汚穢船の洗礼をうけたうえで、深い闇につつまれたお杉の部屋で安息の眠りを手に入れる。」[3]と説明しているが、参木が革命運動と距離をおき、傍観者の位置にとどまっているからこそ、このように三つのベクトルの間を移動することが可能なのである。しかし良心的中国知識人である倪煥之は、労働者の運動に同調し、参加し、のめり込む。『倪煥之』のなかの上海は革命都市のイメージに集約されており、革命に立ち上がった学生・労働者たちとそれを制圧しようとする帝国主義者の警察という二極対立構造の革命状況がどのように倪煥之の行動や心境に還元されるかということがもっぱら描かれているのである。

二三章には、ゼネストが始まった六月一日と推定される日の倪煥之の心境について書かれている。倪煥之は、自分はいままで労働者は知識が少ないと思い、労働者に対して、子どもに説教をするような態度で自分の意見を押し付けていたのだが、「彼ら（労働者――筆者注）だけが本当の価値ある仕事をしており、生活の必需品を生産しているのだ。いま彼らが知っていることがあまりにも少なすぎるというのなら、いったい誰がもっと知っているというのだ。（中略）実際は、彼らは本を読み飽きた人よりも、知っていることが決してそれほど少ないわけではない。しかも知っている内容は決してうわっつらでなく、もうろうとしてもいない。」と考えるようになり、倪煥之は「思わず自分の浅はかさを嘲笑した。まるで自分の身体が突然縮まり、だんだんと小さくなるように感じるとともに、これから会いに行こうとしている

あのブルーカラーの友人たちのことが、とても偉大に思えた」のである。そして、「私は彼らに教訓を垂れることはできない。私の話は彼らにとってまったく余分なものである」、「私は逆に彼らから学ばなければならない」とまで考えるようになる。

⑤一九二七年の倪煥之

上海では、五・三〇事件以後、労働者の蜂起による暴動が三度（二六年一〇月二三日、二七年二月二一日、二七年三月二一日）おきた。一度目、二度目の暴動は失敗に終わったが、三度目の暴動は成功、軍閥軍を駆逐し、租界を除く上海全市を制圧した。二五章と二八章の時代背景は第三次暴動時期に設定されている。

上海第三次暴動成功後、倪煥之は、学校の接収・調査、教職員の交替という作業に加わるのだが、この作業過程で、「授業が止まってしまったが、いつ再開するのかめどがたっていない。この学校を接収し、あの学校を受領するということばかりに気をとられている。」という問題意識をもつようになる。それに対し、王楽山は「これもまた必要な手続きだということをわかってもらいたい。」と説明するのだが、倪煥之は「必要な手続きだということはもちろん知っている。だが手続きを終えたあと、どのような方針があるというのだ。一度も詳しく討論していないではないか。」と考え、接収作業の無計画性に疑問を呈するのである。

また倪煥之は、いまだ覚醒せざる農民を対象とした郷村教育の必要性を考える。倪煥之は、王楽山に「この郷村教育問題は、非常に深く、非常に切実なものだと思う。農民にとって自己の地位と使命を理解することは難しくない。しかしちょっとした啓発を受けることが必要だ。さらに農業技術の改善についても、もっときめこまかな指導が必要とされ

ている。」と語っている。そして郷村教育にたずさわる人材を養成するためには、まず郷村師範学校を開設することが必要だと考え、その計画を練る。しかし倪煥之の周囲にいる活動家たちは、革命という状況下では、それは不急の問題であるとみなす。倪煥之はそのことへの憤激を、王楽山相手に、「僕はなんども郷村師範の計画を提出した。（中略）彼らの大多数はこれはあとからゆっくりできることであるという。我々の国は中国だ。農民が支えている中国だ。しかし郷村教育はゆっくりやってもいいという。それなら急いでやらなければならないことは何なのだ。」とぶつけている。

二九章と三〇章には、二七年四月一二日、蔣介石による反共クーデターが起きた後の倪煥之について書かれている。倪煥之は革命の失敗に落胆し、「何もすることがなくなる。郷村師範計画の草稿はポケットにしまわれたままだったが、だんだんすりへり、しまいには引出しのすみにほうりこまれてしまう」。そして倪煥之は、酒に溺れる毎日を過ごし、身体をこわし、腸チフスにかかり、三十五歳にもならぬ若さで病死するのである。

以上倪煥之の教育との関わりをまとめると、辛亥革命後小学教師になった倪煥之は、当初教師という仕事に生きがいを見いだすことができなかったが、一七年蔣冰如が校長をつとめる小学校に転勤してからは、教育によって民族・国家を統一し、富強化させようという教育救国の志を抱くようになり、「児童中心主義」、「学校こそ社会」、「教育こそ生活」というデューイの教育思想と類似した考えの持ち主である蔣校長と協力し、いろいろな教育改革を試みるようになる。デューイが中国を訪問したのは、一九年四月で、その後二年二カ月にわたって全国で講演・講義活動をおこなった。デューイの北京における講演録は、二年間に十余版を重ねる。[4] 一九年冬を時代背景とした二二章で倪煥之は、王楽山に「最近デューイの講演録をみたが、いくつかの意見が我々の意見と偶然一致していた。校長の蔣冰如は、『英雄の見るところ

はほぼ同じである』とふざけ気味に話していた。」と語っているが、蔣冰如はデューイの中国訪問によって中国教育界にデューイの教育思想が浸透する以前に、それを受容し、実践に移していたデューイのプラグマティズム教育思想の信奉者であるとみなしてよいであろう。一九年北京を震源地とした五四運動の衝撃が、倪煥之のいる江南の田舎にも波及し、政治に無関心であった日常生活から覚醒した倪煥之は、町民にも反帝国主義の運動のために立ち上がるよう演説をして訴えるとともに、学校という狭い場所だけでなく社会全体を改革していきたいと思うようになる。二四年、倪煥之は国民党第一次全国代表大会で採択された「宣言」を読み、国民革命時期における教育者の役割は、革命のための教育をおこなうことだと考えるようになる。

二二章からは舞台が上海に移る。五・三〇運動を時代背景とする二二章前半と二三章の倪煥之は、運動の渦中に身を置き、都市労働者の勇気ある行動を目撃し、労働者階級こそ中国の反帝民族解放運動の中核であり、最も戦闘的な部隊であると認識するようになるとともに、労働者を師と仰がなければならないという自己卑下意識にとらわれる。しかし二七年三月を時代背景とする二五章と二八章の倪煥之は、革命の進展にともなって露呈してきた大衆運動の無計画性に疑問を持つとともに、郷村師範学校のさしせまった必要性を強く認識するのである。だが周囲の人間は郷村教育問題より革命を優先させるべきだと考える。そして四・一二クーデター後、倪煥之は病死する。

このごとく倪煥之の郷村師範計画は実現されぬままに終わってしまうが、二〇年代中期以降、中国ではいろいろな郷村教育運動が起きていた。たとえば晏陽初を初代総幹事とする中華平民教育促進総会や黄炎培を代表とする中華職業教育社は、ともに二六年から独自の郷村教育運動を始めている。また倪煥之の考えに近いものとして、陶行知（一八九一～一九四六）の暁荘郷村師範学校がある。陶行知を主任幹事とする中華教育改進社は、二六年「中華教育改進社改造全

国郷村教育宣言」を発表した。そして陶行知は、二七年南京に、暁荘郷村師範学校を創立し、デューイの理論を裏返して、「生活こそ教育」「社会こそ学校」を主張、「教学做合一（なすことを媒介とした教授・学習の統一）」を提唱する。陶行知はデューイの教育理論を批判的に吸収し、中国の教育環境にあうように変更を加えたのである。

倪煥之は、王楽山のように、大衆を先導し、運動をおこなう職業革命家にもなれなかったし、また陶行知のように郷村師範学校を開き、教育改革に打ち込むこともできなかった。革命運動と教育改革運動との間に身を置き、そのどちらでも生命の充分な燃焼を行いえないまま、病魔に犯され、死んだのである。

茅盾は、二九年五月「読『倪煥之』（『倪煥之』を読む）」という評論を発表している。二九年八月『倪煥之』が単行本として出版されたとき巻末に一部が収録されたこの茅盾の評論は、現在に至るまで『倪煥之』評価の基調を形づくっている。そのなかの「小説の時代背景をこの十年近くの歴史に設定したのはこの作品が初めてであろう。しかも意識的に革命的な小ブルジョア知識人である一人の人物が、いかにこの十年の時代の潮流の激動にゆすぶられたか、いかにして農村から都市へ、教育への没頭から大衆運動へ、自由主義から集団主義へと変わっていったかを描いたのはこの『倪煥之』が最初である。[5]」という一節は、『倪煥之』を一番簡潔・的確に評価したものとして、『倪煥之』を論ずるさいしばしば引用される。しかしこの評言は、むしろ茅盾の自作『虹』（三〇年、開明書店）にあてはまる部分が多い。『倪煥之』とほぼ同じ五四時期から五・三〇運動までを時代背景とした『虹』には、時代の激動のなかで、主人公の梅女史が地方都市から上海へ、家庭婦人の生活、教師生活から大衆運動へ、自由主義から集団主義へ変わっていくありさまを描いている。しかし『倪煥之』の主人公倪煥之は、大衆運動の渦中に身を置くなかで、教育への関心を持ち続けていたし、都市に身を置きながらも、農村へも関心を向け、郷村師範学校開設を切望していたのである。また集団主義への疑問も呈

している。倪煥之は第三次暴動成功後の革命状況に、好ましくない傾向を見いだすのだが、王楽山は倪煥之に「きみたち教育を語るものには、このような言い方がないかね。無理やり注ぎこまれた知識はけっして真実とはならない、自ら体験して得たものこそが真実となる。だから子供が火をいじっているときはそのままにし、刀遊びをしているときもそのままにする。現在誤りを犯していることがいくつかあるが、まさに子供の火遊び、刀遊びに同じで、手を火傷し、指先を怪我したときはじめて本当の知識を得ることができるのだ。」と語り、現状肯定もやむなしという立場をとる。倪煥之は、この意見に対して、最初から火や刀が危険だとわかっている人も、みんなにつきあって初歩的な体験を味わわなければならないのか、このようなことはまったく無駄ではないか、と反論する。五・三〇運動の時期、倪煥之は、「一尾の魚となり、『彼ら（労働者――筆者注）』の海の中に沈み、徹頭徹尾『彼ら』の気分に浸る、そして『彼ら』もまた魚で、自分と仲良く隊を組んで泳ぐ」状況を理想的境地として夢みていたのであるが、第三次暴動時期には、集団のなかで、やみくもに同一行動をとることには疑問を抱くようになるのである。

葉紹鈞は五三年人民文学出版社から『倪煥之』を刊行するとき、二〇章と二四～三〇章を削除した。二〇章は、五四文化運動の歴史的意義に対する作者の解釈を論述している筋とはまったく関係のない部分で、小説の流れを遮断し、前後のつがなりを悪くさせているため、芸術的配慮によって削除したのだろう。いっぽう二四章以降の削除については、おもに政治的配慮が働いたと思われる。二六、二七章に、農村の革命闘争の暗黒面が描かれているが、これは毛沢東の農民評価と対立する。[6] また二五章には倪煥之の郷村師範学校に寄せるあつい期待が書かれている。倪煥之は、結局郷村師範学校を開設できないまま、病死したが、この郷村師範学校を実現し、教育の普及・改良に取り組んだ教育家陶行知は、四六年死去した後五一年までは「偉大な人民教育家」と称されるものの、五一年映画「武訓伝」批判をきっかけと

して、その教育思想が批判されるようになる。また二三章では、労働者の革命性を賞賛し、教育者である自分の存在意義を否定し、主体性を放棄した状態で革命の隊列に加わることを願っていた倪煥之が、二五章では理性的批判精神を回復し、集団主義や大衆運動へ疑問を抱き、個人主義と集団主義、教育と大衆運動との間で、揺れ動くようになるのだが、解放後の政治的基準では、二三章に描かれている、自ら進んで思想改造をする倪煥之の姿が理想とされ、二四章に描かれている倪煥之の動揺性は、否定されるべきであるとみなされるようになった。しかし五三年にこのような政治的配慮によって省略された二四章以降に書かれている農民の前近代意識や無知蒙昧さの指摘、大衆運動の無計画性への批判、革命状況下で教育問題をどう位置づけるかといったことは、文革を経た今日、あらためて考え直さねばならぬ重要な問題であり、この二四章以降の記述があるからこそ、葉紹鈞の『倪煥之』は、中国で量産された左翼革命文字の枠組みを脱した、独自の生命力をもつ作品となりえたのだと考える。

三　おわりに

中国では、中華民国期になって第一次国内革命戦争（二四～二七年）、第二次国内革命戦争（二七～三七年）、抗日戦争（三七～四五年）、解放戦争（四五～四九年）と寸断なく戦争や革命が続いていたため、多くの知識人は目前に繰りひろげられている激しく危険な軍事闘争に身を投じていった。倪煥之も、第三次暴動時期にやみくもに同一行動をとる集団主義への疑問を抱くものの、王楽山の、集団から出て、「傍らに立とうとするものは誰もが、権利を失うのだ。歴史の歯車に向かい合って、それがどんなぐあいに回るのか、ゆっくり回るのか、速く回るのか、ということをぼけっと見ていることだけが可能で、自らの手でそれを動かすことができないのだ。」という言葉に説得される。そして知識人、労働

者、農民が一体となり、歴史の歯車を回した結果、中華人民共和国が建国された。しかしその代償として、李沢厚が指摘しているように、「危急存亡という歴史的局面と苛烈な現実闘争のなかで」、「啓蒙という思想的主題は、救国の政治的主題に圧倒されてしまった」のである。[7] また中華人民共和国建国後も相次ぐ政治運動のなかで、啓蒙という思想的主題はほとんど顧みられることがなかった。

冒頭で紹介した『班主任』は、この五四時期以来長い間埋没してしまった啓蒙という思想的主題を発掘し、人々の前に提示したことにより、時代を画する作品となった。文革後、党と政府は、四つの現代化を実現するために、教育に力を入れ、優秀な人材を育成する方針を打ち出した。そして『班主任』の張先生と同じように、教師としての自信と責任を取り戻し、啓蒙の役割を担おうとする教師が増えた。だが経済が発展し、国民の生活水準が大幅に向上しているにもかかわらず、教育関係の予算は低くおさえられ、教師の待遇は一向に改善されない。八七年になって、ルポルタージュという形式で、この問題について鋭く切り込んだ作品『神聖憂思録――中小学教育危境紀実』（「人民文学」第九期、八七年）が発表された。蘇曉康・張敏共著のこの作品には、何人かの小学校、中学校（本稿では中国語の「中学」をすべて中学と訳すが、実際には日本の高校・中学に相当する。）教員の窮状が報告されており、大きな反響を呼んだ。五四時期から活躍している老女性作家冰心は、このルポに敏感に反応し、八七年十一月十四日の「人民日報」に「我請求（私はお願いする）」という一文を寄せ、国民の多くがこの作品を読むよう訴えた。また八八年には短編小説『落価（値下がり）』（「収穫」第五期、八八年）を執筆し、そのなかで店員をしている少女が、中学教師をしている「わたし」に対して、「すべてのものは毎日値段が上がっているが、ただ二つのものだけが下がっている。一つは廃品、もう一つは知識」という言葉を思わず口にしてしまうという場面を作り出している。

より一層重苦しさをもって読者の胸を打つのは、江灝の『紙床（紙のベット）』（「中国作家」第四期、八八年）である。わずか七平方メートルしかないため、ベットを一つしか置くことのできない部屋に二〇年間住んでいる中学校教師夫妻が、白血病にかかった娘が病床で繰り返す「自分のベットがほしい」という願いをかなえてやるため、面子を捨てて、教育局副局長の家へ贈物をもって、広い部屋の割当を頼むのだが、断わられ、娘はささやかな希望もかなわぬまま死ぬ。模範教師の称号をもつ母親が娘のためにしてやれることは、紙でベットを折り供えてやることだけだった。この小説の読者のなかには、自前の車を持つことが夢でがんばっていた人力車夫が死んだ後、近所に住み、この車夫の車をたびたび利用していた知識人の「わたし」が、生前の彼の望みをかなえやるために紙製の車を作って供える話が書かれている郁達夫の『簿奠（ささやかな供えもの）』（「太平洋」第四巻第九号、一二四年）を思い浮かべた人も少なくないであろう。『簿奠』と『紙床』とを読み比べると、解放前、金銭や権力とは無縁であり、一所懸命仕事をしても物質的満足を得ることができない人間といえば、人力車夫などの肉体労働者であったが、現在では、それが教師などの知識人となっているという違いがはっきりと浮かび上がってくる。また中年の大学教授夫妻の日常を細部にわたって描いている方方の中編小説『行雲流水』（「小説界」第六期、九一年）では、小中学校教員だけでなく、大学教員も経済的にかなり厳しい状態に置かれており、ゆっくりと研究することが不可能になっていることが問題として取り上げられている。

『倪煥之』には、五四運動前夜啓蒙という思想的主題だけに専心していた青年教師が、五四運動、五・三〇運動を経て、第三暴動時期には、啓蒙という思想的主題と救国という政治的主題との折り合いをうまくつけ、両立させることを志すようになるものの、四・一二クーデター後絶望感に襲われ、病死してしまう姿が描かれている。この『倪煥之』を読むと、明治維新後、安定した政府のもとで国民教育制度が整い、国民の教育水準が急速に向上した日本と異なり、辛

亥革命は成功したものの、軍閥同士の内戦や外国の侵略により救亡の危機に直面していた中国では、国民の啓蒙という問題に腰を据えて取り組むことがいかに困難なことであったかがわかる。中国は四九年救亡の危機を脱し、解放を迎えたが、今度は政治運動の嵐が吹き荒れる時代となる。文革終結の翌年七七年に発表された『班主任』は、冒頭に示したように、文革という長期間に渡る政治運動に翻弄され、型にはまった思考方法で物事を短絡的に判断する習慣がついている少年・少女の姿を通して、啓蒙という思想的主題の重要性を読者に訴えかけた。だがその一〇年後に発表された『神聖憂思録――中小学教育危境紀実』を契機に、文革後再び日の目を見るようになった啓蒙という思想的主題が、今度は富国という経済的主題によって圧倒されてしまい、啓蒙の役割を担うべく期待されている教師の待遇問題がなおざりにされていることを憂うる作品が次々に登場するようになっている。一昨年中国は計画経済から市場経済への転換を決定した。今度中国では市場が堂々と日の当たるところへでてくるようになるであろうが、このような時にこそ、市場の影に隠れがちになる教育・福祉・環境といった問題に光をあて、市場中心の支配的文化を告発し、バランスのとれた社会のあり方を模索する働きを担う文学作品がより一層多く出現することが期待される。

注

(1) 『倪煥之』の引用は、すべて開明書店版『倪煥之』(二九年)を収録している『葉聖陶集』第三巻(八七年、江蘇教育出版社)からおこなう。

(2) 葉紹鈞「作者自記」(『葉聖陶集』第三巻、八七年、江蘇教育出版社、二八六頁、もと『倪煥之』、開明書店、二九年)

(3) 前田愛「SHANGHAI 1925――都市小説としての上海――」(『文学』、八一年八月、岩波書店、二二頁)

(4) 李桂林『中国現代教育史』(九一年、吉林教育出版社、二九頁)

(5) 茅盾「読『倪煥之』」(「文学週報」、二九年五月一二日、遼東図書公司、六〇二頁)

(6) 二六、二七章には、北伐軍の進撃に呼応して倪煥之がかつて暮らしていた町でおきた土豪劣紳打倒運動の様子が書かれている。土豪劣紳の蔣士鑣は、革命の波が自分の町にも押し寄せてくるかもしれないという知らせを耳にし、すぐに国民党に加入したため、町の党員集会では、攻撃の矛先が土豪劣紳の蔣士鑣ではなく、開明紳士の蔣冰如に向けることが決定されるのである。毛沢東は、「湘南農民運動考察報告(湘南省農民運動の視察報告)」(『毛沢東集』第一巻、七二年、北望社、二一三頁、もと「中央副刊」、二七年三月二八日)のなかで、当時農村でおこりつつあった革命闘争について、「農民の目には、決して少しのくるいもない。だれが悪らつで、だれが悪らつでないか、だれがもっともひどく、だれがそれほどでもないか、だれはきびしく処罰し、だれは軽くてよいか、農民はそれを非常にはっきり計算しており、不当な処罰をするようなことはめったにない。」と書いている。しかし『倪煥之』では、冷静で正確な判断力をもたないため、指導者の言論に操られやすい農民像が描かれているのである。

(7) 李沢厚「啓蒙與救亡的双重変奏」(『中国現代思想史論(修訂本)』、九〇年、風雲時代出版公司、二九頁、もと『走向未来』、八六年創刊号)